

関西学院大学・地域・まち・環境総合政策研究センター研究報告 (4) ～第4回研究発表要旨～

Research Note of Region, Town and Environment Policy Studies Center (4)

関根 孝道・萬田 剛史・熊田 豊

Takamichi Sekine, Tsuyoshi Manda, Yutaka Kumada

はじめに(関根孝道¹)

2008年11月8日、大阪梅田キャンパス(KGハブ)で、関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター主催の第4回研究発表会が開催された²。前回(第3回)の開催が2008年5月31日で、前々回(第2回)の開催から一年有余を徒過していたので、今回は言い訳がましく、お詫びの前口上が冒頭のご挨拶となった。今回は約5箇月ぶりの開催。多少胸を張って序文の筆を起こしたい。

前回の研究テーマは「まちなか研究室」だった。具体的には、生誕10周年を迎えた本町ラボ—関学総政が誇るまちなか研究室的全国的な嚆矢であった³—を統一テーマとして、徹底した検証と総括の作業を行った。今回も同じ方式を採用した。統一テーマは「上勝町の研究」。

上勝町をご存じの方は多いと思う。上勝町はあり得ない町だ。全国旋風を巻き起こした本町ラボのように、上勝町は全国的に注目される町の一つである。なぜか。理由はいくつか思い当たる。

第一に、上勝町には、元気がある。この町は、過疎山村にして限界集落、僻地の超高齢化社会と

いうように、マイナーなレットルはいくらでも貼れるのに、明るい話題に満ちている。町に活気がある。老人力というものを信じたくなる。

第二に、過疎対策という、ムダな公共事業によるハコモノづくりが定番であるのに、この町は違う。お上からの撒き餌のようなばらまき行政、役人が机上で考える過疎対策には目もくれない。「いっきゅうさん運動」といって、ひとりひとりが知恵を出して、地域の将来を考えることを町是としている。老人たちは「孫子(まごこ)のためじゃ」といって牽引車となる。

第三に、政策研究の観点からも、この町は学びの宝庫である。財政的にも黒字で合併の申込みが後を絶たないが、平成の大合併に呑み込まれず自主独立路線を堅持している。寝たきり老人も三人しかおらず、老人福祉施設も必要としないので閉鎖されている。代わりに介護「予防」活動センターが開設されている。環境政策的にも、ゼロウェイスを実践し、焼却施設のようなごみ処理施設がない。ごみ収集車もなく住民がごみ集積所に持参する。近くにはリサイクルショップが併設されている。地方行政の常識などここでは通用しない。

1 関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター長

2 第1回研究集会の報告要旨は関西学院大学総合政策研究第25号(2007年3月)105頁以下、第2回のそれは同第26号(同年7月)27頁以下、第3回のそれは同第29号(2008年7月)に、それぞれ収録されている。

3 「であった」と過去形であるのは、その後、本町ラボが閉鎖されたことによる。閉鎖の詳しい理由は筆者の知る限りでないが、重要な都市政策の「act locally」な実践・研究の拠点を失った事実は、否定しえないであろう。一日も早い復活を願いたい。「act locally」を単なる宣伝文句にしてはならないだろう。

第四に、上勝モデルが地域ビジネスの数少ない成功事例となっている点も、重要である。今や全国的に知られた町の「葉っぱビジネス」は、高齢者に生き甲斐を提供するだけでなく、経済的な自立の基礎となっている。過疎山村の農業ビジネスで年収1000万というのは嘘ではない。「明るい農村」もやり方次第で実現可能なことが実証できる。地域振興政策の観点からも格好の研究対象といえる。上勝モデルの謎解きは地域振興政策的にも興味深い。

今回の研究発表として3本の論稿を収めた。

第一報告は、筆者の「上勝研究の今後の方向性」である。本研究センターは「地域・まち・環境」の最先端の総合政策研究を目指している。二番煎じ・三番煎じの研究には関心がない。上勝町はすでに研究され尽くした感がある。なので、上勝研究の新たな切り口を模索してみた。ここでの報告は当日のブレーン・ストーミングが素材となっている。個人的には、上勝林業の実態に最も惹かれるが、将来の課題とせざるを得なかった。

第二報告は、本学院生の萬田剛史による「上勝町は地域振興のモデルとなりうるのか?～『葉っぱビジネス』にかかわらない人々の視点から」である。葉っぱビジネスに関「わる」人々の報告は腐るほどある。敢えて関わら「ない」人々に焦点を当てた点に独創性がある。上勝研究の序論ともいえる部分で、上勝町とその諸施策の一般的な紹介に始まり、「上勝町が本当に過疎山村の楽園」といえるのか、シニカルに検討されている。

第三報告も、本学院生の熊田豊の「映像を活かした上勝町のすびんの素描～Kさんとの出会いの事例から」で、メディア情報学科の研究生らしく、映像メディアの掘り下げた現地取材が浮き彫りにした上勝町のナマの姿が紹介されている。熊田の関心は人にある。映像は意図的な操作が可能だ。従来の上勝映像に嘘はないか。作為的な主観で上勝イメージが脚色されていないか。熊田

の報告も、上勝サクセス・ストーリーを一旦は疑い、自分の目で見たものしか信じていない。

私も萬田も熊田もフィールド・ワーカーであり単なる評論家ではない。今回の報告も現場主義のスタンスが貫けたと思う。今後とも、「現場に始まり、現場に終わる」研究スタイルを大切に、伝えていきたい。議論の空中戦には欺瞞しかない。自己満足しかないとも言える。社会科学には自然科学的な実験がないぶん、現場での検証作業が欠かせないと思う。上勝町で実際に見聞したものを信ずることにした。

最後に、本研究は兵庫県の研究助成(平成20年度社会連携事業・大学コンソーシアムひょうご神戸社会連携委員会)を受けたことを特記しておく。研究タイトルは「環境先進『上勝町』の環境保全と地域振興から学ぶ—過疎山村地域における環境保全と地域発展の両立した新たな地域振興モデル」であった。研究成果は、兵庫県の過疎山村の地域振興策に応用可能なようにまとめて恩返しとすることを、お誓いしたい。

第1 上勝研究の方向性(関根孝道)

1. 上勝研究事始め

同じ研究テーマでも接近方法が異なれば成果も違ったものとなる。同じ食材でも調理方法を変えれば、別の料理となるのと理屈は同じだ。同じ調理方法でも味付けや盛りつけ次第で斬新さがだせる。上勝町は紹介され尽くされた感があるので、上勝研究の接近方法をまず考えることにした。

萬田によると、上勝町で論文検索をかけたところ、94本の論文がヒットしたという⁴。

同じ論題のものは一本としてカウントした結果、以下のような分類集計が萬田によってなされた。いわば上勝研究成果の到達点である。

4 CiNiから2008年11月15日現在の検索結果による。

① 彩(いろどり)葉っぱビジネス関係	24本
② リサイクル・環境政策に関するもの	18本
③ 上記①と②の両方を扱ったもの	3本
④ 交通に関するもの	3本
⑤ ITに関係するもの	3本
⑥ 学校のとりくみに係る教育関係のもの	7本
⑦ 上勝町全体を紹介したもの	9本
⑧ 彩以外の上勝農業に関するもの	3本
⑨ 廃校活用策を論じたもの	2本
⑩ その他 ⁵	9本
⑪ 不明	4本

多少補足しておこう。

①の彩(葉っぱビジネス)⁶というのは、いわゆる「ツマ(端?)もの」⁷で、料理の飾りや四季感を出すために使われる葉っぱ類を、全国各地の料亭などに出荷する農業ビジネスを意味する。これが大ヒットし上勝町の経済的な起爆剤となった。今や上勝町の代名詞となるほど全国区的な知名度をもつ。その主要な生産者が地域の老人で年収1000万円も夢物語でない。上勝町の「打ち出の小槌」として研究が集中するのも当然であろう。

⑤も葉っぱビジネスと関係し、葉っぱの生産・流通に携わる老人がコンピューターを使いこなし、情報収集・出荷・決済等にITを駆使する。そのために、老人向けIT教育も盛んで、この点を分析したのでであろう。同町はIT先進町でもある。ITを高齢者が使いこなすのだから脱帽である。

④は特区制度を活用し、上勝町でなされた有償ボランティア輸送事業を紹介したものと推測される⁸。⑥は、おそらく、上勝町の学校教育の特色、とりわけ環境教育事例などが紹介されているのであろう。「親の背中を見て子は育つ」というが、同

町では、たとえば町ぐるみで先進的なりサイクル運動が実践されているので、子どもたちは身近な現場で環境学習ができる。大人の後ろ姿から学ぶ子どもの教育スタイルが関心を惹くのも頷ける。少子高齢化の波は同町でも深刻だが、逆転の発想というか、廃校となった学校施設を再生して若者定住促進に活用している⁹。これに焦点を当てたのが⑨であろう。

以上の諸施策を万遍なく論じたのが⑦であろう。

2. 接近方法

上記のような上勝論文は、同町の研究対象分野の関心の高さを示すと共に、研究の未開拓分野を教えてくれる。山間部に位置する同町は、木頭杉で有名な隣村の旧木頭村と並んで伝統的に林業の盛んな地域であるのに、この部分の研究成果がないのが気にかかる。徳島県の林業統計によると、同町の森林面積は9386haにも及び、そのうちの8581haが私有林で、全体面積の90%以上にも達する。21世紀は農業・林業などの第一次産業の時代と確信するが、実際、同町において林業による地域振興は可能だろうか。同町は林道づくりにも独創性がある、中央指導のマニュアルによる林道開設では山が荒れてしまうとして斥け、独自の規格・工法で林道をつくり成功している。

一方、上勝町の研究・紹介にはマンネリ化現象も見られる。多くは成功事例として同町を讃えるが、本当に、サクセス・ストーリーには裏がないのか。成功事例といっても、一発打ち上げ花火のようなもので恒星のように光を放ちつづけ得なければ、やがて終期を迎える。とすれば、同町の

5 上勝町の地質、町史、町長、棚田関係(棚田の構造・草刈りの有無・差異が植物群落に及ぼす影響等)、民家の建築史・建築意匠、僻地における医薬分業、等々、種々雑多なものが含まれる。

6 以下、適宜、「彩ビジネス」「葉っぱビジネス」「ツマもの事業」「彩事業」等々というが、実体は同じものである。

7 国語的な表記としては、「妻物」の字を当てるようだが、その語源的な由来までは押さえていない。

8 この輸送事業の概略につき、後掲の萬田原稿、参照。

9 この点についても、後掲萬田原稿、参照(若者定住用の町営住宅5棟のうち、2箇所は廃校を再利用したものだという)。

負の側面にもスポットライトを当てる必要がある。同町の将来性をクールに分析しないと、単なる上勝万歳の大合唱で終わってしまう。誉め殺しにされるのも気の毒である。

更に、上勝町には観光資源としての目玉はないのか、宝もの探しが必要なことも看取できる。確かに、観光パンフレットなどには、いくつかの観光スポットが紹介されている。アートによる町おこしも試みられ、町内の随所に著名アーティストの芸術作品が屋外展示されている。が、灯台もと暗しというか、地元の人のお眼鏡にかなう観光スポットと、地域外の人に関心対象とは若干ズレている。たとえば、同町には「おなふたさん」—正式な表記は調査未了—という神さまを祭るお社があって、探しものが見つかるという御利益がある¹⁰。本願成就した暁には、お好みの甘い御菓子と一基の鳥居を持ってお礼参りをするのが、仕来りとなっている。正確な所在地は地元でも知る人は少ない由だが、「探し物の神さま」として、潜在的には大きな可能性を秘めていると思われた。展示アート作品もハコモノとしては洗練されているが、誤解を恐れず言えば、これを見るために再訪する気にはならない。町内中央には勝浦川の清流が滔々と流れており、これこそ万華鏡のような輝きを放つ自然界の芸術作品だと思う。とすると、第三者的な観点から、上勝町の魅力紹介の映像作品づくりも重要な課題であろう。同町の価値は自然だけでなく人の良さにもあるので、映像作品は自然と人々を紹介したものでなければならない。

かくして、筆者が林業による地域振興ということで上勝林業論、萬田が「斜め」から見た上勝の将来的な課題論、熊田が上勝の良さを伝える人と自然の映像作品づくりを担当することに固まった。林業論は、林学系や経済系からの接近はあるが、地域振興や社会福祉論などと絡めた総合政策的な

接近は、寡聞にして知らない。萬田の研究対象は、地元の寂れた日用品商店であるが、上勝研究初のものであろう。萬田に言わせると、日用生活品店の存続は過疎山村にとって地域振興を論ずる以前の死活問題だという。熊田の映像作品は脚色のない上勝の素朴な人々の日常生活と山あいの自然を描写するであろう。このような上勝映像は従来なかったものである。

3. 研究テーマ—具体論いくつか

各人の研究テーマは上記のように決まったが、その過程において、ブレーン・ストーミングが試みられた。いくつかのものを紹介しておきたい。上勝町の深掘りした分析ともなろう。

(1) 彩ビジネスの実態

上述した葉っぱビジネスは新たな過疎山村のビジネスモデルとして語られることが多い。最も多い論文研究テーマであることも上述した。実際、彩事業は農家の高齢者の収入を著しく底上げしただけでなく、周囲への波及効果も極めて大きい。たとえば、主として彩事業の視察のために、年間、一万人前後の視察者が上勝町を訪れるという。その受け皿として、視察者の町内視察をコーディネートする三セク会社があり、視察者はここを通して上勝研修を受けることになる。コーディネートは有料で一人当たり500円—良心的な価格設定といえよう—徴収されるが、その代わり視察者は煩わしい調査先との日程調整等の作業から解放される。視察の大まかな要望を伝えれば全てアレンジしてくれる。視察団の宿泊先として「月の宿」という温泉付きの三セク施設も用意されている。ここでは視察のビジネスモデルができあがっている。これらの三セクは地元雇用の

10 当時、筆者には探し物が二つあって、一つは沖縄で紛失した会員カード、今一つは大学構内で行方不明となった筆入れであったが、お参りして貰ったところ、筆入れは早速出てきた。さすがの「おなふた」さんの霊験も沖縄島には及ばない思いきや、会員カードは再発行して貰えた。これも神通力の為せる業(わざ)かも知れず思いは膨らむ。

受け皿でもある。お土産代等を含め視察団の落とすお金は地域経済を支える。が、この成功物語に陰はないか。上勝町の全ての人が彩事業に携わっている訳ではあるまい。とすると、彩事業に関わら「ない」人々の目線には彩事業はどのように映るのか、この切り口からの接近も面白い。これは後掲萬田原稿の接近方法ともなった。

(2) 広報戦略

上勝町はメディアでしばしば取り上げられる。ローカル番組で紹介されるよりも、全国ネットのテレビ局で、全国放映されることも多い。同町は「みなさま」のNHKのお気に入りでもある。関西での知名度よりも全国的に著名なものこの点と関係がありそうだ。上勝町自身も中央つまり東京をより意識している節(フシ)がある。そこには東京一極集中の逆利用といった広報戦略があるのでないか。研究会に出席した片寄教授によると、東京との結びつきを深め成功した事例が、湯布院だという。この湯布院戦略に倣って成功したのが上勝町なのかも知れない。この点は関西メディアの相対的な影響力の低下を意味するが、情報戦略的には、東京に向けて発信することがメジャー・デビューに欠かせないと、片寄は指摘する。

(3) 上勝評価

メディアが多く上勝町を取り上げるには理由がある。上勝町の情報発信は非常に「Catchy」だという。これがメディアの食いつきのいい原因である。今や僻地過疎山村と聞くと絶望的にも思われがちだ。なのに、同町には明るい話題に事欠かない。元気な高齢者、年収1000万円の夢のような農業、

老人ホームの廃止・転用、全国からの若者流入、知恵を出し合ういっきゅうさん運動、ゼロウェイスト環境政策の実践、等々、ありえない話ごろごろしている。これらがメディアの琴線に触れるのであろう。これが同町の評価を高め年間一人もの視察者の呼び水ともなる。同町の外部評価は高まる一方で、元気で明るい模範的な農山村として、好循環サイクルができています。環境先進町としての評価も高い。上勝モデルは簡単にはマネができない。同時に、バラ色の上勝賛歌はマスコミが創造したもので、実際には多くの将来的な課題を抱えているのではないか。一旦、色眼鏡を外して直視することも重要である。ある意味「devil's advocate」的な上勝評価の方が有用かもしれない。

(4) 旧木頭村との比較

上勝町の隣村に旧木頭村がある。「旧」という文字がつくのは、木頭村は合併により消滅し、現在、自治体としては存在しないからである。木頭村はかつて全国的に名を馳せた。理由は、国主導のダム建設に断固反対し、地域破壊のダムに頼らない村おこしを試み、地元の清流那賀川の自然環境を死守したからである。町と村の違いはあったが、上勝町と木頭村は、地域の中央には清流が流れ、山間部に在って林業が盛んであるなど、共通項も多い。両町村は剣山スーパー林道の起終点で結ばれていた。以前は、全国的にも、木頭村の方が知名度は高かったと思う。その後の両者の運命は象徴的で、一方は華々しく生き残り、他方は儂くも消え去った。運命を違えた分岐点は何だったか¹¹。過疎山村の地域振興策を考える上で比較研究が有用であろう。限界集落対策、若者定住対策といった個々の政策ごとの比較検討も、有意義であろう。

11 木頭村は国のダム政策に反旗を翻したことで徹底的に苛められて締め付けにあった。中央からの兵糧攻めにも遭い「悪代官」によって冷飯を食わされたという。ダム建設は阻止されたが、その後、反対の旗振り役の町長が替わると、従来の自主独立路線は軌道修正され、ハコモノ・公共事業依存の「おんぶに、抱っこに、添い寝」の体質となり、他の過疎農山村と同じ運命を辿ったのかも知れない。検証作業の必要な部分である。

(5) 特産品等

上勝町には直営店のような「いっきゅう茶屋」がある。訪問者はここで簡単な食事をとり地元の特産品を購入できる。いわば地産地消のビジネスを展開しているがパツとしない。彩ビジネスの成功と比べるべくもない。月の宿で出される料理にも共通するが、地元の食材が自信をもって提供されていない。特産品も新鮮で安価な野菜類は買うが、目玉となるような—とくに若者受けしそうな—お土産品があるわけではない¹²。もっと地域ブランド商品があっても良さそうだ。魅力的な上勝ブランド商品づくりが急務であろう。一方、体験型の地域サービスの提供という点では、学ぶべき点は多い。たとえば、同町には、日本の棚田百選にもノミネートされた美しい棚田が山間部に広がるが、一部は市民農園として開放されていて人気が高い¹³。それ以外の現地体験ビジネスも盛況で成功している。ふる里を失った多くの都会の人々を惹き付ける。年間を通じて各種のイベントも目白押しである。これらの分析検証作業も面白いであろう。

第2 上勝町は地域振興のモデルとなりうるのか? ~「葉っぱビジネス」にかかわらない人々の視点から (萬田 剛史)¹⁴

はじめに

今回のレポートは、フィールドとなる徳島県勝

浦郡上勝町への第一回調査(2008年10月19日)と、それを踏まえて2008年11月8日に行われた「関西学院大学・地域・まち・環境総合政策研究センター」の第4回集会での議論をもとに作成したものである。

1. 問題提起

近年、地方の衰退が激しい。農林水産省の『平成19年度 食料・農業・農村白書』によると、現在、全国に13万9千の農業集落が存在し、そのうち、生産活動に不可欠な地域資源の利用や維持管理を共同で行うなどの集落機能を有していることが確認されたのは、11万900集落となっている。中山間地域¹⁵に含まれる過疎地域等においては、地域の自治組織の最小単位である集落が過疎化・高齢化することにより、集落機能が低下し、機能維持が困難になることが懸念される。市町村への調査によると、高齢者の割合が50%以上の集落のうち、4割が集落の機能が低下、または集落の維持が困難とされている。また、集落内が実態として無人化し、通年での居住者が存在しない「消滅集落」となる可能性については、今後10年以内に消滅の可能性がある集落は423集落で、中部圏、四国圏で高い割合となっている¹⁶。

そのような状況の中で、典型的な中山間地域である上勝町が「葉っぱビジネス」による地域振興や「ゼロ・ウェイスト運動」をはじめとした環境先進事例地といった観点から注目されている。そうした取り組み以外にも、廃校となった小学校跡地を

12 品揃いの中では「神田茶」という高発酵茶が中高年には喜ばれるが、若者向きではないし、職場等へのお土産にも適しない。

13 農園利用料は、棚田の場合、ワンシーズン5万円であるが、他にも果樹や畑地の市民農園サービスも提供されている。希望者は多く抽選が行われたりする。

14 関西学院大学総合政策研究科博士課程前期課程在学

15 中山間地域の定義は明確ではない。概ね、a)1995年の農業センサスによる分類である「都市的地域」「平地農業地域」「中間農業地域」「山間農業地域」のうちの「中間農業地域」と「山間農業地域」を中山間地域とする考えと、b)aに、①特定農山村法(特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律)②山村振興法③過疎地域自立促進特別措置法④離島振興法⑤半島振興法⑥沖縄振興開発特別措置法⑦奄美諸島振興開発特別措置法⑧小笠原諸島振興開発特別措置法の以上8つの法に指定された地域を加えたものを中山間地域とする考えがある。ここで、b)の考えに従うと、過疎地域は中山間地域に含まれることになり、b)の考えをとることで、農業・林業地域だけでなく、漁浦地域を含めた「条件不利地域」の村落を含めることになる。本稿ではb)の立場から、中山間地域という言葉を使うこととする。

16 農林水産省(2007)『平成19年度 食料・農業・農村白書』pp.146~147。

利用した若者向けの定住促進住宅の建設など様々な取り組みが行われている。その結果、2002年以降、転入人口が転出人口を上回る年もあり、活性化振興計画をまとめた1991年からのI・Uターン者は125人に達し、町の人口の約6%を占めるまでに至っている¹⁷。

しかし、その一方で、人口減少が止まらない¹⁸現状があるなど、地域振興のシンボリック的存在として取り上げられる上勝町においてもまだまだ問題点が存在しているように思われる。

そうした状況の中で、今までに発行されている上勝町に関する文献を見てみると¹⁹、「葉っぱビジネス」による地域振興や「ゼロ・ウェイスト運動」をはじめとした環境先進事例地としての上勝に焦点をあてたものばかりであり、「葉っぱビジネス」に関わっていない住民の日常生活のレベルにおいて、それが与えた影響というものが明らかになっていない。そうしたことから本稿では、典型的な中山間地域である上勝町において、「葉っぱビジネス」にかかわっていない住民の日常生活(生活必需品の買い物等)のレベルがどのようにして保たれているのかということに焦点を当てていくことにする。

2. 現状

2008年10月19日に現地調査へ行った際には、上記のような問題意識を持った上で、住民の日常生活はどうなっているのかということを生計必需品の購入という観点から探るため上勝町役場付近の商店で店主の方へお話を伺った。当商店(写真1お

よび写真2)は、役場から比較的近い位置にある個人商店であり、最低限のものがここで買えるようになっている。それでも、モータリゼーションの進展した近年、近隣の勝浦町、徳島市、小松島市の大規模スーパーへ買い物に行く人が多いとのことであった。なお、役場付近だけで3つほどの商店を確認した²⁰。

その他にも、介護予防活動センター「ひだまり」という施設へ調査に訪れた。この「ひだまり」は、上勝町の住民(主に高齢者)が生きがいをもって元気で生活できるように、そして、介護が必要にならないようにと、様々な活動を展開する施設である。例えば、趣味の活動や情報提供などの取り組みが行われている。2005年度からNPO法人ゼロ・ウェイストアカデミーが施設の管理を行い、シルバー人材センターの拠点ともなっている。また、展示施設では高齢者などが製作した工芸品やリサイクル商品などアイデアにあふれた商品の販売も行っている。

17 笠松和市、佐藤由美(2008)『持続可能なまちは小さく、美しい-上勝町の挑戦-』学芸出版社。pp. 184-185

18 上勝町ホームページによると、総人口は1985年に3000人を切り、2009年1月1日現在の人口は2003人。

19 本稿末尾の参考文献等を参照されたい。

20 なお、上勝町における「葉っぱビジネス」を紹介したDVD『夢のタネいりどり』の15分23秒あたりから17分2秒あたりにかけて、「葉っぱビジネス」に取り組みながら商店を営んでいる方とそこを訪れた常連客のやり取りが記録されている。その場面においては主に、(1)近隣に大規模スーパーが出来、赤字経営をしている。(2)その赤字を「葉っぱビジネス」で得た収益がカバーしている。(3)お店は井戸端会議の場所であり、地域における情報の源であるから、何としても経営を続けたい。ということが語られていた。こうしたことから、上勝町における各商店は厳しい経営を強いられているが、その存在は重要なものであるということが推察できる。



写真1. ヒアリング先の商店



写真2. ヒアリング先の商店内



写真3. 介護予防活動センター「ひだまり」



写真4. 介護予防活動センター「ひだまり」内の展示・販売スペース



写真5. 介護予防活動センター「ひだまり」内。奥は職員の事務スペース。手前は誰でも憩うことの出来る自由スペース。

その他にも、2002年、町内のタクシー業者が休業したことをきっかけに、高齢者をはじめとした交通弱者の移動手段が縮小している状況を打開し

ようと、2003年5月に、町が「構造改革特区」の認定を受け、町社会福祉協議会に事業委託することで、上勝町有償ボランティア輸送事業に着手、

2003年10月から運行を開始した。その後、2004年5月に構造改革特区が全国展開されたことにより、通常業務として輸送事業を実施している。そして、2006年4月から上記のひだまりの施設管理を行っているNPO法人ゼロ・ウェイストア카데미に事業委託し、現在に至っている。

この上勝町有償ボランティア輸送事業においては、町の登録ボランティアと自家用車等を活用し、路線バスへのアクセス、診療所通いや買い物等のための移動サービスを充実させることにより、住民へのサービス向上を図ることを目的としている²²。この事業の一番の特色は、自家用車をタクシー代わりに使用することが可能な点だ。2007年6月1日現在で、登録運転手は16名、登録車両台数は21台となっている。基本的には、会員しかこの制度を利用出来ないことになっており、会員資格は

- ①上勝町内に住所を有する者及びその親族。
- ②上勝町内に存する官公庁、病院その他の公共的施設の利用者。
- ③その他上勝町内において日常生活に必要な用務を反復継続して行う必要がある者。

となっている。

こうした取り組み以外にも、上勝町においては、若者定住促進のために、町営住宅を5ヶ所建設(うち2ヶ所は廃校になった小学校を改造、あるいは改築)することで、過疎化を食い止め、生活レベルの維持を図ろうとしているほか、限界集落²³対策も実施予定となっている。上勝町では、55の集落のうち、54%にあたる30もの集落が限界集落になっており²⁴、あくまで現町長の笠松氏の案であるが、

「集落再生プロジェクト」というものが検討されている。この「集落再生プロジェクト」は、はじめに5地区の中から熱意のある集落を1集落ずつ選ぶことからはじめ、町は各集落に派遣する5人程度の「集落再生コーディネーター」を募集し、必要な経費を負担する。各集落は、コーディネーターを中心に国内外の先進事例を学び、みんなで集落の未来像を思い描き、再生計画を立て、住民主体で実行していく。そして、1年に1度、その成果を町民に発表し、検証を加えながら、順次、全集落に広げていくという計画である。

現段階で上勝町においては、上記のような生活レベルの維持策が実行・計画されている。

22 料金設定は、徳島県市部地区における一般乗用旅客自動車運送事業(タクシー)のおおむね2分の1を目安としている。具体的には、走行1キロメートル当たり100円(乗車地点から目的地までの走行距離(切上げ)により算出する。)

迎車時100円(利用の依頼を受けて、利用会員宅まで迎えに行く際の料金。)

時間待ち料金10分当たり100円(利用の途中で、時間待ちがあった場合に待ち時間(切捨て)で算出する。)

23 「限界集落」とは長野大学教授の大野見氏が提唱しだした用語である。大野氏によると、限界集落とは「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、独居老人世帯が増加し、このため集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」のことを指す。(大野見(2005)『山村環境社会学序説－現代山村の限界集落化と流域共同管理－』農山漁村文化協会。)

24 笠松、佐藤(2008)p. 193参照。

3. 今後の研究展開

～参考文献・参考URL・参考資料～

文献調査および第一回現地調査を踏まえた、今後の研究展開としては、主に「葉っぱビジネス」に関わっていない住民の生活レベルの維持(生活必需品の買出し等)はどうなっているのかということに関して、さらに深く調査・研究を進めていきたいと考えている。

そのためにも、より詳細な現地調査(聞き取り調査など)や文献調査が必要である。そして、ここで明らかになった課題等を、近年日本においても広まりつつある社会的企業²⁵によって解決していけないかということを探る予定である。

そして、先述の上勝町で予定されている「集落再生プロジェクト」が今後実施されれば、内容に共通する部分が多い、兵庫県の「小規模集落元気作戦」²⁶と比較し、その共通性および差異性を明らかにした上で、今後の地域振興のあり方を探っていきたいとも考えている。

笠松和希・中嶋信(2007)『山村の未来に挑む－上勝町が考える地域の活かし方』自治体研究社。

笠松和希・佐藤由美(2008)『持続可能なまちを小さく、美しく－上勝町の挑戦－』学芸出版社。

柏雅之・白石克孝・重藤さわ子(2007)『生存科学シリーズ4 地域の生存と社会的企業－イギリスと日本との比較をとおして－』公人の友社。

目瀬守男・笠松和希(2002)『地域活性化シリーズ⑤新・いきゅうと彩の里・かみかつ』明文書房。

田畑保(1999)『中山間の定住条件と地域政策』日本経済評論社。

矢内諭(2008)『自立・交流する中山間地域－東北農山漁村からの地域デザイン－』昭和堂。

財団法人ふるさと情報センター(1999)『改訂版中山間地域対策ハンドブック』大成出版社。

上勝町「上勝町有償ボランティア輸送特区」。2008年12月21日
<http://www.kamikatsu.jp/mayor/tokku_yusou.htm>

上勝町「有償ボランティア実施の状況」。2008年12月21日
<http://www.kamikatsu.jp/mayor/tokku_genjo.htm>

農林水産省(2007)『農林水産省／平成19年度 食料・農業・農村白書全文』。2008年12月20日
<http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h19/zenbun.html>

鳥根県「鳥根県：「中山間地域」のその他の定義」。2008年12月20日
<http://www.pref.shimane.lg.jp/chiikiseisaku/chusankan_k/chusankan-jyourei/teigi_sonota.html>

兵庫県「小規模集落元気作戦」。2008年12月27日
<<http://shoukiboshuuraku.web.fc2.com/>>

株式会社いろどり(2007)『夢のタネいろどり』(DVD)株式会社ダイメディア。

25 社会的企業について簡潔に述べている著作が、柏雅之・白石克孝・重藤さわ子(2007)『生存科学シリーズ4 地域の生存と社会的企業－イギリスと日本との比較をとおして－』公人の友社、である。以下、同著作7～8ページから抜粋。

(社会的企業は)1990年代以降、ヨーロッパで急速に台頭してきた。雇用・福祉・環境・教育など多様な分野で活躍している。なお、社会的企業の統一的定義はないが、一般的には以下のような特徴をもつ組織とされる。

(1)社会的ミッションの存在。ミッションとは地域社会への貢献のことである。

(2)社会的事業体という性格の存在であり、社会的ミッションをわかりやすいビジネス形態で事業活動を継続していくことである。

(3)社会的革新性の存在。

また、コミュニティによって所有・管理される「社会的所有・管理」を重要視する場合や、利益の社会的ミッションをもつ事業への再投資(利益の外部分配の禁止)を重視する場合もある。

社会的企業とはボランティアセクター(NPO)とは異なり、民間企業、公共、ボランティアの各セクターが部分的に重複したジョイントセクターの一種と考えられる一方、企業的努力(精神)によって社会的革新性や社会的事業の担い手としてそのフロンティアを進め、同時にジョイントセクターとして他セクターとの協働を行うなかで社会的ミッションを果たしていくことが期待される。

26 少子化・高齢化が著しく進み人口が減少する集落を対象に、都市と集落の住民のパートナーシップを中心に据え、持続可能な「交流」をキーワードに、2008年度から3年間のモデル事業として展開されている。既にモデルとなる16集落を選定しており、アドバイザーの派遣、集落住民による地域づくりの合意形成、都市パートナーとの交流、拠点整備や本格的な交流の展開へと取り組みが進められている。詳しくは、小規模集落元気作戦ホームページ<http://shoukiboshuuraku.web.fc2.com/>を参照されたい。

第3 映像を活かした上勝町のすっぴん的な 素描～Kさんとの出会いの事例から

(熊田 豊)²⁷

はじめに

筆者はこれまでに様々な分野の映像番組を制作してきた。映像番組の制作の過程は、ある種、社会調査と類似した点がある。徹底した聞き取り調査と分類、構成、そして結論を出すことができた際、映像番組は学術的な作品として価値を持ち、同時に専門家のみでなく、映像を見るすべての人にメッセージを伝えることができる。

本稿は、学術的な映像番組制作の立場から、徳島県勝浦郡上勝町でおこなったフィールドワークの成果(2008年10月19日、11月7、8日の二回分)を文章にまとめ、今後の調査と映像作品制作の架け橋とするものである。

1. 目的

環境先進町として注目を集める上勝町は、折からの環境ブームとも重なり様々なメディアにより取り上げられ、一躍有名となった。中でも注目されたのは「葉っぱビジネス」と「ゼロ・ウェイスト運動」である。これら活動の成功は、過疎に悩み、収入源に悩む多くの地域を驚かすとともに、ゴミ問題に頭を抱える都市部からも注目を集めた。結果、多数のメディアによって「葉っぱビジネス」と「ゼロ・ウェイスト運動」成功の町といった上勝町に対するイメージが作りあげられた。これは上勝町にとっても、観光、視察、住民意識等の面から、プラスの効果をもたらしたであろう。

しかし、イメージによって固定された成功は、時として観光地としてのブランドを守る際に生じ

る、負の面も生み出すことが往々にしてある。イメージとしての成功ではなく、実体的な成功を掌中に収めることが重要なのである。

メディアにより成功一辺倒につくられた上勝のイメージを一旦は捨て去り、課題のあら探しともいえる新たな映像作品を世に問うことは、真の意味で上勝の発展に貢献することになる。上勝を褒め殺してはならないと思う。このような発想に基づき、上勝のウラをも露わにして真の姿を伝えることが筆者の関心事項である。

2. フィールドワーク概要

2-1. 初回調査

上勝町における初回の調査はごく簡単なものであった。上勝の名所である棚田を見学し、

「ゼロ・ウェイスト運動」に係わるゴミステーションを見学するといったお決まりのコースを駆け足でまわって、映像制作のロケーション・ハンティング、下見のような作業をした。

偶然とは面白いもので、下見の際たまたま立ち寄った水場で、一人のおばあさんと出会った。彼女の名はK—上勝の頭文字のKをとった—さんとしておく。上勝で民宿を営み、「棚田の学校²⁸」という里山体験イベントをご夫婦で主催し、「葉っぱビジネス」に参加する笑顔の素敵なおばあさんであった。筆者が調査で訪れたこの日は偶然「棚田の学校」の開催日であったが、参加者が一家族しか集まらなかったため、筆者らも途中参加することとなった。

2-2. 第2回調査

2度目のフィールドワークは11月7・8日と二日

27 関西学院大学総合政策研究科博士課程前期課程在学

28 参考文献 Office空と海ホームページに詳細あり。

間かけての調査となった。

7日は「棚田の学校」の行事に参加し、Kさんの営む民宿に宿泊した。8日は「ゼロ・ウェイト運動」のゴミステーション等を調査した。このような予定にした理由は、フィールドワーク初回に出会ったKさんが、上勝成功物語の謎を解くような鍵となる面白い立場にあると感じたからだ。面白い立場とは以下の4点である。

- (1) 自主的に「棚田の学校」という里山体験イベントを行っている。
- (2) 「棚田の学校」参加者の要望から農家民宿をはじめた²⁹。
- (3) 「葉っぱビジネス」を副業的に行っている。
- (4) 上勝で最も有名な檜原の棚田³⁰ではなく市宇地区の棚田で農業やイベント等の活動を実践している。

11月7日の「棚田の学校」のイベントは収穫祭であり、主として餅つきが行われた。参加者は前回参加の一家族に加え、15名ほど。徳島県内の参加者が多い中、東京から訪れた方もいた。運営側は主催のK夫妻のほか、一字地区の住民や「勝浦川流域ネットワーク」のメンバーが集まった。今回に限らず、「棚田の学校」で举行されるイベントの多くは棚田との関わりが深い。当然のようであるが、イベント内容は田植えや、収穫といった米にまつわるもののほか、蕎麦や野菜、お茶のイベントもある。これらは、ある種棚田の機能を有効活用したもので、急斜に作られたため、細かく区切られて、大きな機械を使う事ができず手間暇のかかる棚田であるが、それぞれの異なった作物を作付けする際には、水管理が自由自在にできる棚田は実に有効的なのだ。この方法は、景観美をウリにした他の観光名所化した棚田では実践すること

が難しく、棚田本来の機能を重視する市宇地区ならではの方法といえるかもしれない。

当日の夜、民宿の宿泊客は筆者らのみであったため、K夫妻より民宿にまつわる苦労話から昔の上勝の暮らしぶりまで、様々な話を直接聞くことができた。とりわけ、民宿にする際の手続きの煩わしさと、許可を得たときの喜びの話が何度も出た点が、印象的であった。

3. フィールドワークからの考察

3-1. Kさんの役割

Kさんからの聞き取りで分かった重要な点は、以下の2点である。

- (1) 「葉っぱビジネス」は副業でありそれ以外の農業が主である。
- (2) 「棚田の学校」「民宿K」の収益はほとんどない。

上記2点は何を意味するのか。これは「葉っぱビジネス」を始めたことにより生まれた利益と余裕により、里山体験イベント、その延長としての民宿を開業し得たのではないかと推測された。つまり、「葉っぱビジネス」の収益を利用して、上勝の観光産業を活性化し、同時に、エコツアーにも手を広げて、参加者の心を豊かにしうる体験事業を行っているのではないか。このことから、Kさんの事業は、それだけでは観光に結び付きにくい「葉っぱビジネス」とも繋がりをもち、上勝の活性化に寄与している事例のように思えた。

29 「棚田の学校」を実施する中で宿泊希望者が増えたため、農家民泊を始め、2008年10月より正式な手続きのもと、農家民宿として営業する。

30 全国棚田百選にも選ばれた上勝で最も有名な棚田。「檜原の棚田のオーナー制度」も行われている。

3-2. 取材慣れという弊害

～参考文献・参考URL・参考資料～

上勝の人々、特に「葉っぱビジネス」の関係者は、カメラ・テレビ慣れしている印象を受けた。具体的には、「葉っぱビジネスをしてよかったと思う点はなんですか?」といった質問に対しては、「夢がある」といったようなドラマティックな答えがすぐに返ってくる点である。筆者のこれまでの経験では、そのような答えは、いくつも質問してやっと聞き出せるか、あるいはインタビュアーが誘導することで聞きだす類のものである。特に、大きなカメラ³¹を向けられたことのない人はそれだけで緊張し、映像として使いやすい言葉、印象的な言葉がすぐに出てくることは稀である。

この事実がどういった意味をあらわすのか。それは、取材慣れしたために、ドラマティックではあるが形式的な返答しか、インタビュアーは望むことができず、本音を聞き出すことが非常に難しいことを意味するのだ。

4. 今後の取り組み

町の特性を知るには通年の調査、取材が必要である。特に「葉っぱビジネス」や「里山体験イベント」のような四季に係る活動を含めた取材にはその必要性が痛感させられる。同時に、取材慣れた地域における取材は、表面上の物はすぐにも得られるが、本当の姿を映し出すには時間をかけることが重要である。しかし、調査、取材には資金と時間の制限が設けられているため、中々思い通りの研究をできるものは限られているであろう。この状況の中でKさんに出会えたことは非常に面白みがあり、時間を幾らか削減できることを期待する。良い調査にも良い取材にも徹底した聞き取りが基本となるため、可能な限り上勝を訪ね、研究することが今後重要である。

日本で最も美しい村『上勝町の地域資源 ～檜原の棚田～』
2008年1月10日

<<http://www.utsukushii-mura.jp/modules/smartsection/item.php?itemid=41>>

株式会社いろどり(2007)『夢のタネいろどり』(DVD)株式会社
ダイメディア

上勝町『ゼロ・ウェイスト宣言』2008年1月10日

<<http://www.kamikatsu.jp/zero-waste/frame.htm>>

Office 空と海『棚田の学校行事予定』2008年1月10日

<<http://www.soratoumi.com/kamikatsu/08tanaga.htm>>

31 筆者はSONYのFX-7により撮影している。TV局の取材用と同等の大きさである。

